

Mariyama Youko

丸山陽子

覚せい剤中毒からの生還

覚せい剤中毒からの生還

丸山陽子

目次

少女の頃	7
無理やり打たれる	17
恋愛感情で深みに	21
覚せい剤が生活の中心になる	25
妊娠と出産	31
離婚し必死で働くが	34
スナックを開業	39
牛山との出会い	42
再びホステスに	46
牛山と再婚	57
トラック事業を始める	59

忍び寄る誘惑	63
誘惑に負ける	67
すっかりした娘	75
不可解な現象が次々と起きる	79
ついに逮捕される	91
三度目の逮捕と復帰	96
一人でゼロからやり直す	101
生き方を変える	106
女性の立ち直りを支援したい	110

少女の頃

私が初めて覚せい剤を打ったのは十七歳のときでした。打ったというよりも無理やり打たされたというべきでしょう。そのときは五十年近く経った今でも鮮明に覚えています。

と、その記憶をたどる前に、それまでの簡単なプロフィールにふれておきましょう。

私の郷里は静岡県浜松市。市内のごく普通のサラリーマン家庭に一九五九（昭和三十四）年に生まれて、中学校に入るまではごく普通に育ちました。勉強はできるほうではありませんでした（というか、勉強なんか大嫌いでした）が、登校拒否をしたりするようなこともなく、一応はきちんと小学校へ通っていました。それが、中学生になってからしばらく経って、不良少女の仲間入りをするようになりました。二年生になる頃には学校へもあまり行かないようにな

ります。学校へ行ってもつまらないし、クラスの友達とは話が合わない。少女漫画やアイドル歌手の話題なんか少しもおもしろくない。だから、自然に学校へ行かずに昼間から遊んでいる仲間に加わるようになります。

四人きょうだいで、私は上に兄が三人いる末っ子の長女ですが、その三番目の兄がちょっとしたワルだったのです。その兄の友達が家に遊びにきて、夜遅くに「これから一緒に遊びに行こう」と私を誘うのです。私も断りきれずに、というか、ちょっとその世界に対する興味もあって誘いにのりました。やはり好奇心が人一倍強かったのでしょう。親にバレないよう部屋の窓からそっと抜け出していました。

ところが、物事はそうそううまくはいきません。結局親にバレて、三番目の兄ともどもひどく怒られて、殴られて、特に私は女の子だったから、夜寝るときは手足を固い紐で縛って、私の部屋へ寝に来た母がその紐を自分の手足につないで、勝手に出ていけないようにした。そんなことも一度や二度ではありませんでした。

中学三年生にもなると、学校へはほとんど行かなくなりです。仲間と遊んでいるのが楽し

い。といっても、時代は一九七〇年代の初め頃。今みたいに遊びの種類や場所が豊富にあるわけではありません。当時はやっていたシンナー遊びはうってつけでした。ビニール袋に垂らし、その蒸気を吸っていると、うっとりとした幸せな気分になって、幻覚のようなものが見えて、嫌なことは忘れられる。脳内に独特の世界をかもし出すことができる。もちろん、中毒になったり意識を失ったり、最悪の場合は呼吸困難で死亡するケースもある。それはある程度わかっていただけから、あまり強く吸わないように、あるいは、ちょっといい気分になったらあとは吸ってるふりだけしたりして、自分でコントロールはしているつもりになっていましたけれど……。しかし、のちのちの覚せい剤はそんなコントロールなんかまったく不可能でした。

まったく登校せずに、まったく勉強せずに、私は中学校をきちんと卒業しています。何しろ義務教育ですから、学校側としてもかたちだけでも卒業させないとまずいわけです。一人だけ卒業させないと社会的な体面にかかわる。メンツも保てない。だから、卒業式にだけは出てこいと言われて、卒業証書を受け取りました。

だから、高校進学なんてとんでもない話です。両親もあきらめていたのか「就職してもいい

んじゃないか」と理解あるような態度でした。とはいえ、私は遊んばかりで求職活動なんかしていません。ほとんどの同級生が高校へ進むのですが、中には事情があつて就職希望する人もいました。その一人が地元の大手企業の工場へ就職するため面接に行くと言うのです。それを聞いた先生が「お前も遊んでいないで、一緒に面接を受けなさい」と半ば強制的に勧められました。

工場は、自宅から徒歩七分。通勤に便利なことこの上ありません。しかも、そのもう一人の同級生は臨時工扱いだったのに、なぜか私だけ正社員で採用されたのです。お給料も悪くありませんでした。そこには三年間勤めました。あのまま真面目に勤めて、いい人を見つけて結婚して、幸福なマイホーム生活を送ることになっていけば、私の人生もまったく別のものになっていたでしょうが、「事実小説より奇なり」ですね。

その頃私には仲の良い女友達がありました。といっても、彼女は二十歳で、私よりずいぶん年上です。ある仲間グループの先輩で、大手化粧品会社の美容部員でした。上手な化粧の仕方を教えてもらったり、化粧品のサンプルをもらったりしていました。